

収穫祭特集

—収穫祭今昔—

東京の秋の風物詩となった東京農業大学の収穫祭が、一〇月三十一日から開催される。今年の収穫の喜びを祝うと共に三年前の東日本大震災による被災地の復興、福島第一原発の完全解決を祈る気持ちを込めた収穫祭でもある。本学は創立一二三年を迎える。この収穫祭はいつ始まったのだろうか？

そして学生はどのような事に燃えたのだろうか？

大学史資料室に保存されている資料から昔の収穫祭に思いを馳せてみたい。

○ 収穫祭—その歴史

本学に於ける収穫祭：当初は運動会と称していた：は明治三八年（一九〇五）一〇月に東京高等農学校教頭（後初代学長）横井時敬



第1回収穫祭ポスター 昭和16年(1941)

が、幹事長（後二代学長）吉川祐輝の発意で二子多摩川原に遠足会を催した。その折余興として運動競技その他種々の催しが行われた、これが今日の農大収穫祭の最初である。これに引き続いて翌三九年（一九〇六）一月世田谷松蔭神社境内で、前年同様の遠足会を兼ね運動会を挙げた。越えて明治四〇年（一九〇七）に至って一二月に青山にあった本尾家原において初めて純然たる運動会が開催された。当日の余興としては不調和行列、滑稽行列、社会諷刺行列、農事改良踊、その他、お国自慢の舞踊等が競技の合間に加えられて、数千の観客を集め一躍にして都下に名声を博した。

その後回を重ねるに従い益々余興は演練され、ついに青山名物の運動会になったのである。

これには横井校長が非常に盆踊りを愛好されそれを奨励されたこと、又運動競技においても当時檜舞台であった駒場の農科大学（現東京大学農学部）の運動会に本校の生徒、副島儀作、川上政彦が選手として出場し初めて都下学生競技に入賞、又翌年においても入賞することなどもあつて、東京学生競技会の覇権を握ったことが母校運動会の発展に大きな役割をなしたものと思う。クラス対抗競技に優勝旗が授与されるようになったのは明治四四年（一九一〇）の第七回運動会からである。

以来大正七年（一九一八）の第一二回運動会までは殆ど毎年、余興を中心とした運動会が本尾家原で盛大に繰り広げられたのである。この様なわけで、当時見物人も非常に多く来場し場内整理のために入場券を発行して一般入場者を制限したほどであった。又当時の学生は誰もが一樣



* 横井校長(当時)が奨励された盆踊り(本尾家原)

にクラスの決議を甘受し、一致団結し優勝旗の獲得にあるいは余興の上演に若き血を沸かしたもので、運動会当日一人として欠席するようないふ者はいなかった。この様な経過をたどり農大運動会は益々都下に名声を博し、大正二年(一九一三)第八回の運動会には、賀陽宮恒憲

王、久邇宮朝融王の両殿下の観覧があったなどそれ程有名になったのである。当時宮様方が私立学校の催しに出掛けられたことは前例がなかったようである。その後大正八年(一九一九)に至り本尾家原が住宅となったので渋谷の氷川神社裏(現國學院大学)の空地を陸軍省から借り受け、同年第一三回運動会を同処で開催した。以来昭和三年(一九二八)一〇月の第二一回の運動会までこの氷川神社裏で毎年行ってきた。この間の九年間は運動会に対し熱が最も昇った時代で、この頃が農大運動会の黄金時代と言えよう。従って余興も豪華を極め、農大の徽章を染め抜いた浴衣、別誂えの手拭、花笠、白足袋という衣裳で踊ったものである。又踊りについてはその振り付け、顔の作り等皆専門家を招いて指導してもらったのである。今日大根踊りとして歌われる青山ほとりの「お嫁に行くならお娘さんよ、お百姓さんへ行かしゃんせ」の歌は、この時代大正一二年(一九二三)高等科三年のクラス応援歌であった。昭和三年(一九二八)に至り氷川運動場が國學院大学に払い下げられたことから、学校当局は川崎の中原に約六千坪の土地を購入し、運動場を設置し、翌昭和四年(一九二九)一〇月行われた第二二回運動会から昭和一七年(一九四二)までここで行なわれた。

その後大東亜戦争が益々はげしくなるに従い運動会という名称では開催することが出来なく



* 本尾原で開催された収穫祭



* 本尾原付近略図(港区南青山4丁目付近)

なり、又一方文部省の通達で仮装行列或は踊等も禁止されるようになった。ここにおいて農友会は時代に適応して昭和一六年（一九四一）、全面的に会の機構を改正し名称も報国農友会と改め、運動会、新聞部、斯友会、消費組合等あらゆる学生団体を傘下に収め、体制を整え戦時下に相応しい活動を続けて来たのであった。この改革に依って従来の運動会は収穫祭に改められた。

○ 運動会から収穫祭へ 第一回 収穫祭 一万の観衆を擁し収穫祭盛會裡に終わる

（農大新聞 昭和一六年一月二〇日）

第一回収穫祭は一〇月二六日元住吉本学運動場で盛大に挙行された。当日早朝より時雨気味にて当事者をして甚だ憂色濃からしめたのであるが、幸いにも式典始まる頃合いより雲間に青空すら見せ漸く愁眉を開かせたのである。午前八時三〇分、各関係者全員参集し神官の朗々たる祝詞の奏せられると共に収穫祭式典は執り行われ、次いで学長以下各関係代表、而して最後に学生代表の玉串奉奠を以て九時式典を終了したのである。

畜産学科の教授であった吉村喜彦は「第一回収穫祭の思いで」をこのように書き残している。

当時の本学は、予科（現在の高校に相当）・専門部（現在の短大に相当）（農学科・農芸化学科



元住吉グラウンドで行われた第一回収穫祭のアーチ



収穫祭応援団集合写真

・農業拓殖学科・農業工学科・農村経済科の五科）・農学部（現在の四年制大学に相当）によって組織され学生総数二三〇〇名ぐらいであったが大学行事はいつも全員参加だった。

さて、昭和一五年（一九四〇）まで、運動会の名のもとで、予科・専門部・農学部各科対抗の競技が行われてきた。その中で、各科とも最も力を入れたのが仮装行列・野外劇であった。昭和二年（一九三七）より日支事変（日中戦争）が続いており、物資は次第に不足気味になり、衣料品の配給切符制度（切符がないとタオル一枚も買えない制度）は正に厳しいものであった。このような時代的背景のもとで、第二次大戦へ向って進行していったのであるが、昭和一六年（一九四一）に入って省から「今後大学・高専における運動会の衣装・装飾等は物資節約の機から禁止する。」という通達が出されたのである。

天下の農大（当時私学で農学部のある大学は東京農業大学だけであった。）すこしも騒がず、収穫祭で仮装行列を行いたいが如何とお伺いをたてると「収穫祭ならば差しつかえなし。」と返答があった。

全国の大学・高専で仮装行列が認められたのは他にあったかどうか知らないが、この年はじめて今までの運動会の名称をやめ、第一回収穫祭の看板が掲げられたのである。

その時、少ない材料でアーチを造った学生の

人が私であった。

さて、当時の収穫祭であるが、今のように、文
化学術展とか模擬店などはなく、一日だけの各
科対抗競技、中でも仮装行列、野外劇が農大の
名物であった。そして、いつも優勝するのは予科
であり、農学部先輩たちは自分達の出し物よ
り予科の出し物を心配し、予科を優勝させるこ
とに心をくばるといふ有様だった。この第一回収
穫祭の出し物で私のはつきり記憶に残っているの
は二つしかなかった。第一位の予科と第二位の専
門部農学科の出し物である。

予科の出し物は、作業服に鍬を担った当時の
軍隊式行進と、幼稚園の先生と生徒にふん装し
た行進との組み合わせであり、劇の内容は当時
の時局を反映させたもので、勤労精神を強調す
る演技と勇ましい歌であり、他の一つは園児の遊
戯(兵隊さんよありがとう)で数人の有志が、わ
ざわざ幼稚園へ出かけて習ってきたものであ
った。

第二位の専門部農学科の出し物は、象(張り
こで実物大)を先頭に、ターバンを巻いたインド風
の服装の仮装行列で、グラウンドの中央で円形の環
をつくり、スペイン舞曲の「ボレロ」を踊ったのであ
る。

その優雅さ、振りつけの勇壮さとそのインテリ
ジェンスは、全くすばらしいものだった。

現在と違って学生数は、二〇〇〇人、教職員

総数一〇〇名程度であったので、収穫祭は教職
員も全員参加した。その参加の形式は、収穫祭
が終る頃、グラウンド一杯に広がって円形を作り農
大音頭を踊ったのである。今でもその曲はよく憶
えている。

一 ぐるり囲んで(コリヤサ)農大音頭

さす手ひく手に稲穂の波も

(ヨイヨイヨイトナ)

(サラリサラリトサラリトナ)

つれて踊るよつれて踊るよ黄金色

二 月はほのぼの(コリヤサ)踊りははずむ

故郷に残したあの娘の事も

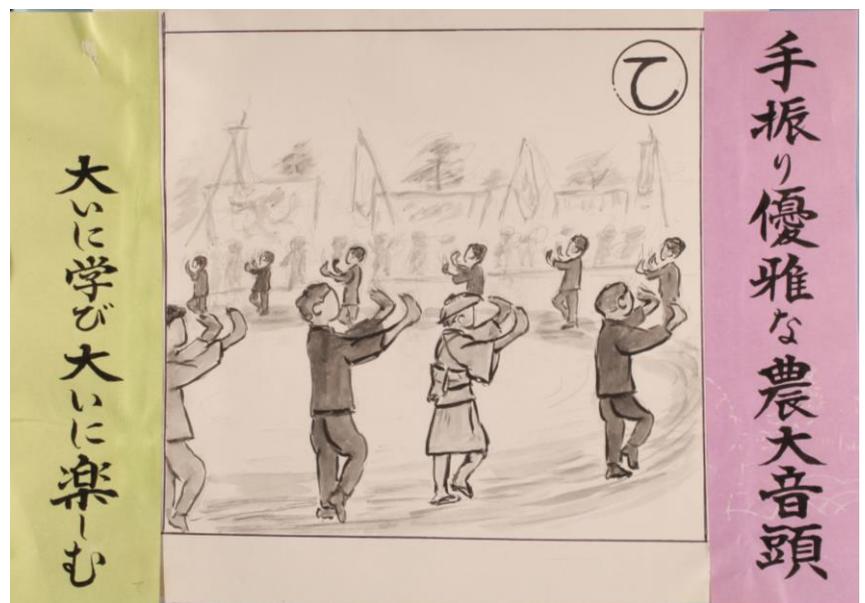
(ヨイヨイヨイトナ)

(サラリサラリトサラリトナ)

今宵忘れて今宵忘れて一踊り

(以下省略)

さて、このようなのかなファイナーレの収穫祭
は昭和一七年一月一日第二回を最後に、第
二次大戦激化のため、昭和一八年から昭和二
〇年まで中止となった。



* 中川音五郎(大正7年卒)画 農大かるた ※昭和55年収穫祭にて展示

○ 戦前最後の収穫祭

昭和一七年一月一日

この戦前最後の収穫祭に予科の学生であった農
芸化学科(現生物応用化学科)教授の蟻木翠は、
自ら参加した思い出を次のように述べている。

「昭和一七年(一九四二)秋の収穫祭、運動会
や野外劇は住吉グラウンド(東横線元住吉駅下
車)で行われた。その、二〇日程前であったと思

うが)、予科・学部先の先輩方が数人私共の予科一年の教室に入ってくられて、「収穫祭に協力してくれ。その気があるものは、手を上げる。放課後教室の前に残れ。」ということで、私は収穫祭に協力することになった。

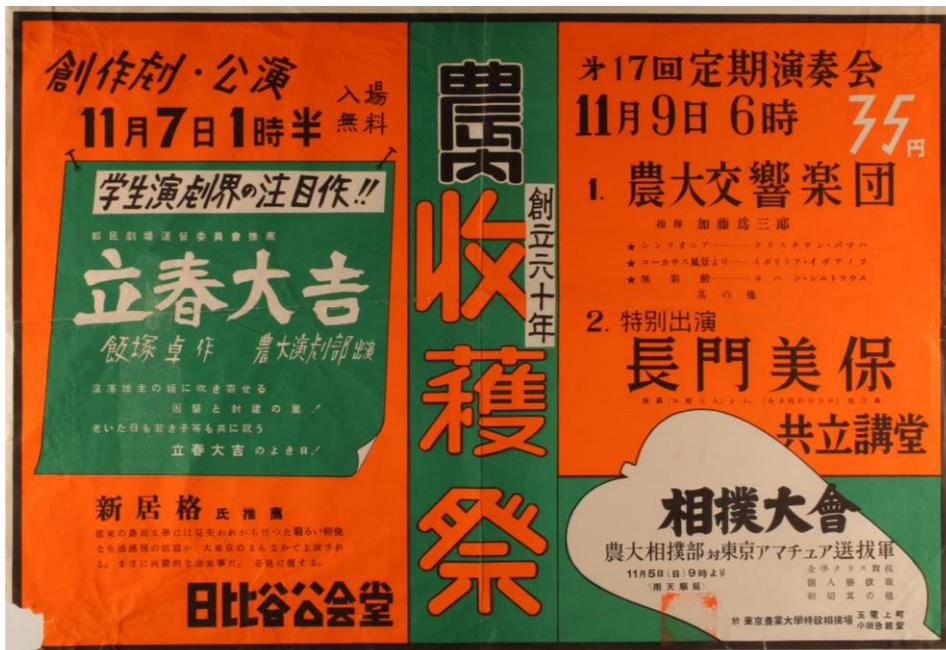
桃太郎の鬼退治を野外劇でやる。鬼とは米英のことだ。そのチビは桃太郎をやれ。お前は犬、お前は猿、お前は雉、鬼はデカイ奴(当時の先輩は、君々をしてくれませんか、というような言葉使いはしなかった)という具合に、役割は直ちに決まった。チビである私は桃太郎ということになった。毎日かどくは定かではない。四〜五日は歩く練習をした。チビなりに大股でラインに沿って、音楽(モーモタロさん、モモタロさん、という例の童謡である)に合わせて進め。犬・猿・雉も練習



* 創立五〇周年記念運動会ポスター 昭和一五年(一九四〇)

していた。衣装や小道具は当日までに作っておく、ということであった。収穫祭の当日、約束時刻に、準備場所に集まった。桃太郎の衣装は鮮やかな紙の短袴と陣羽織、襟などは色紙が張り合わせてあった。持参の和手拭いに日の丸を付けた鉢巻をし、紙織りを張り付け竹竿を脊に縛り付け、玩具の刀を腰に差した。犬、猿、雉も若干の紙衣装を付け、手足や顔に色を塗った。それらしくなった。鬼は裸に直接色を塗りたくり、顔にも着色、ふんどしを締め、角を付けた鉢巻をし、牙を歯に差し込んだ。赤鬼・青鬼、一角・二角、胸や背中に、米、英、と黒々と書かれていた。鬼に痛めつけられて来た百姓もかなりいた。その場で適当に動員して振り付けたのである。鬼退治劇が終わると、後は号令一過全員青山ほとりだ。踊って踊って衣装など壊れるほど踊って出口に引き上げる、ということ、全て青山ほとりで壊して、予科の野外劇は終わった。良くできた、と先輩達から誉められた。好評価を得たのであった。また、この日、裸の鬼はかなり寒かったそうである。実に素朴で爽やかな戦時中最後の収穫祭であった。農民の収穫を心から、ささやかに祝う祭りであった。なにごともし上辺よりも心が大切と思いたい。翌昭和一八年(一九四三)には収穫祭は行われず、やがて私どもの多くは学徒動員で故郷の部隊に入営した。」

次に行われた収穫祭は終戦の翌年、昭和二一年(一九四六)十一月一日、現在の世田谷の地で開催され、以来創立年を冠した収穫祭が世田谷キャンパスで、また厚木、オホーツクキャンパスでも地域貢献の一環として開催されている。



* 創立六〇周年記念式典と供に開催された収穫祭のポスター 昭和二五年(一九五〇)

○ 大根踊りと収穫祭

さて、今では農大といえ、**「青山ほとり」**、通称**「大根踊り」**といわれる程有名な応援団の演舞がある。この誕生秘話である。

農大を巣立って行った卒業生、また農大生なら誰でも知っている。

そう、あの歌である。現在ではテレビ、新聞等により**「大根踊り」**の愛称で全国の人々に親しまれ、農大と言え、あの**「青山ほとり」**と言われるまでになった。

箱根駅伝を始めとする色々なイベントで、全学応援団の学生が大根二本を両手に持ち片足を右、左に蹴り出し、それに合わせて両手に持った大根を振り上げる。

一回見れば直ぐに覚えることが出来る、実に単純な踊りである。その歌詞はこうである。

「農大生元氣あるかい

〔押忍(オス) 押忍(オス) 押忍(オス)〕

苦しきときの父となり

悲しきときの母となり

楽しきときの友となる

いざ歌わんかな 踊らんかな

農大名物青山ほとり」

一 青山ほとり常盤松 聳(そび)ゆるタンク

は我母校

何時も元氣は山を抜く 農大健児の

意氣を見よ

今日も勝たずにおくものか

そりや突き飛ばせ 投げ飛ばせ

二 お前達や威張ったって知つちよるか お米の

実(な)る木は知りやすまい

知らなきや教えてあげようか おいら

が農場へついてこい

金波銀波の打つ様は

そりや踊りゃんせ 踊りゃんせ

三 農大健児はすまないが お米の実る木がつ

いている

昔も今も変わらない 人間喰わずに生

きらりよか

命あつての物種じゃ

そりや惚れりゃんせ 惚れりゃんせ

四 お嫁に行くならお娘さんよ お百姓さん

に行きやしゃんせ

難しい事は抜きにして ちよっくら考え

御覽(ごろう)じろ

お腹の貧(ひも)じい事はない

そりや結婚せ 結婚せ



この歌は大正一二年(一九二三年)今から九〇年前である。当時本学の専修科に在学中であった市山正輝が作詞したもので農大を讃え、東京府民に農業の尊さを訓えたユーモアたっぷりの歌詞である。

曲は市山の出身地北海道湯の川温泉付近で歌われていた曲を取り入れたと言われている。

当時の学生の気質に一致し、学生に広く愛唱

され、野球や相撲、陸上競技の応援で歌われた。

この様な記事がある。

昭和七年五月七、八日「青山ほどり」に大根を持って応援

(農大新聞 昭和七年五月二五日)

関東学生相撲連盟大会が国技館に於いて華々しく開かれた。

農大応援団は、白紋付き姿の団長人參一本を片手にやおら立ち上がり、人參一振り、三百の農大軍大根を片手に「お嫁に行くなら」の蛮声をはり上げ場内を圧した。

多分当時の応援は各自が人參や大根を振りながら蛮声を張り上げたのであろう。

では今のような踊りのスタイルになったのは何時からだろう？こんなエピソードがあった。

今のスタイルを作ったのは加藤日出男(現「若い根」の会)会長である。

加藤は読売新聞のインタビューにこのように語っている。

復興の街笑い呼ぶ「大根踊り」箱根応援でおなじみに

(“東京の記憶”読売新聞 企画・連載)

初演は昭和二六年(一九五一)一〇月、渋谷の八千公前だった。トラックに乗って現れたのは、東京農大の「収穫祭宣伝隊」の学生たち。法被姿で、両手に大根を持ち、歌と太鼓に合わせて踊

り出した。

突然の光景に、道行く人はあっけに取られて足を止めた。だが、ユーモラスな踊りを眺めるうちに、みるみる笑い顔が広がった。踊り終えた宣伝隊は、用意した大根一〇〇〇本をただで配った。

騒ぎを聞きつけて集まってきた人たちは、われ先にと大根を奪うように取っていったが、誰もが笑顔で「学生さん、ありがとうございます」と声をかけた。

「大根を持って踊れというのか。バカにするな」

最初、応援団員は猛反発した。大根役者ならぬ「大根応援団」を引き受けるなど、もつてのほか。

要は、格好悪いというわけだ。踊った後に大根を配ってはどうかとも提案した。

「我々も腹をすかせているんだ」。さらに反発された。理屈でだめなら、実際に見てもらおうしかない。

自分で考えた踊りを後輩たちの前で踊ってみせると、みんな腹を抱えて笑った。

加藤も踊りながら笑った。腹の底から笑い合った後、「平和というのは、人々に笑える自由があることではないのか」と気づいた。大学当局からも説明を求められた。

「農大は、作物の収穫増だけを追求していればいいのでしょうか」。

大根踊りで笑ってもらい、その大根を配って喜んでもらう。それこそ、本物の収穫祭だと熱弁を振るった。加藤には一つの計算があった。街の真ん中で大根を持って踊れば、きっと新聞に載る。白くて太い大根なら、写真も映えるはず。にらんだ通り、全国紙に大きく採り上げられた。

(以下割愛)



第一二三回収穫祭ポスター 平成二六年(二〇一四)

創立一二三年目の収穫祭、誰もが笑顔になるような楽しい祭りになって欲しい。

名誉教授 内村泰



* 運動會記念繪ハガキ 明治 44 年(1911)



* 運動會記念繪ハガキ 大正 2 年(1913)

※本文中で*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、下記までご一報くだされば幸いです。

東京農業大学 図書館 大学史資料室

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

電話:03-5477-2526

FAX:03-5477-2546